



京都モノがたり— ①⑥

京都に歴史を刻み、洗練を極めてきた京の銘品の数々。伝統工芸に
かくれた物語をご紹介します。

インテリアとしても注目を集めている提灯。アーティストとのコラボレーションが目にとまり、装飾品としての需要も増えてきている。最近ではヒゴを魅せて和紙を張らないランプシェードの注文もある。

京提灯

古くから人々の生活の中で燈されてきた提灯。仏事をはじめ、夜道を歩くときの手元灯や商店の看板灯としてなど、室町時代末期ごろより重宝されてきた。その役割を電気が担うようになった現代でも、京都は提灯と密接な関係にある。なかでも夏、祭事で用いられる提灯は、多くの人の知るところであろう。

そのひとつが、祇園祭。神輿洗を迎えるための「お迎提灯」に始まり、各山鉦には形やデザインの異なる「駒形提灯」が燈り、宵山を幻想的に彩る。山と鉦が建つ「山鉦町」のエリアの町家には、奉燈と書かれた提灯が軒先に吊るされ、通りを明るく照らす。

あまり知られていないところでは、京都をはじめ近畿地方を中心に8月後半に行われている地藏菩薩くようえの供養会。地藏盆といわれるもので、子どもの名前が入った提灯が路地などに飾られる。京都では夏の最後を締めくくる身近な祭事として、いまなお各地に残っている風習だ。このように、夏の年中行事と

提灯は密接に関わってきたといえる。

京提灯は手のかかる地張製法

提灯づくりはまず竹選びから始まる。ほどよい水分、繊維の細かさ、しなやかさを持ったものが理想とされ、季節によって真竹や破竹などを使い分ける。製法は骨のつくり方で巻骨まきぼねと地張じばりに分類され、京提灯は地張製法が用いられる。巻骨とは竹ヒゴが丸い状態まるぼねの丸骨を使用し、1本のヒゴを螺旋状に巻いていくもの。これに対し地張は平らな状態ひらぼねの平骨のヒゴをつくり、専用の定規で計りながら型に合うよう長さの違う骨に裁断していく。この骨を1本ずつ輪にして和紙で留め、型にはめて「骨かけ」していく、手間のかかるものだ。

一般に地張提灯は丈夫といわれる。これは骨かけした竹ヒゴに何本もの糸を縦にかける「糸吊」を行い、固定しているから。また、平骨であることで和紙



提灯はサイズ、形が豊富でそれぞれに型が必要。一番古いものは大正時代から使い続けている。



おもな道具は型と鉋。他の伝統工芸と違い京提灯づくりは今でも手に入る道具を使用している。



輪になったヒゴを型の目に合わせてはめていく。箇所によって直径が異なるため使用するヒゴの確認が必要。



紙張は弟の諒さんが担当。霧吹きで湿らせた厚い和紙を小麦の糊でつけていく。絶妙な突っ張り具合にするのが難しい。



型一面に対し1枚の定規があり、ヒゴを定規に置いてカットする。1本の竹からとったヒゴでつくると、節の位置が揃うため骨を組んだときに美しく仕上がる。



絵付けに使用するのは墨と水彩絵の具。担当する9代目の護さんは、毎年新調される南座の提灯の文字も手がけている。

を面で受けることができ、厚い和紙を張ることが可能。同サイズの巻骨提灯と比べると重厚感がある。

紙張は技術が求められる工程で、和紙の断ち目が分からないように張るには熟練の技を要する。断ち目ギリギリに張り合わせると口が開いてしまい、紙の重なりが大きいと光が入ったときに美しくない。その「際」を見極めるのが難しい。糊が乾いて型をはずし、ヒゴとヒゴの間をしっかりと畳み込んで枠(上下の輪っか)を付ければようやくベースが完成。あとは絵付けを行い、雨や汚れよけの油を引いて仕上げる。

一貫して手掛け提灯の可能性を広げる

提灯は竹割、骨かけ、紙張、絵付けなど分業が主流で、京提灯のように伝統的な製法かつ一貫してつくるところは少ない。また提灯そのもののニーズも少なくなっている。多くのものがそうであるように、消耗品である提灯もまた大量生産でき少しでも安価

なもの重宝されているのだ。

そんななか、手づくりの質の良さ、風合いを知ってもらいたいと奮闘しているのが、京・地張提灯を専門につくる小嶋商店。江戸時代の寛政年間に創業した小嶋商店は京都南座の提灯を手がける老舗で、10代目の小嶋俊さん、諒さん兄弟がすべての工程を自分たちで手がけ、伝統を発信していくブランド「小菱屋忠兵衛」も立ち上げている。美しいヒゴを魅せるランプシェードやアーティストとコラボレーションした提灯をはじめ、提灯づくり体験教室を行うなど活動は多岐にわたる。これらはすべて京提灯の質の良さを知ってもらうために他ならない。「伝統を次世代に伝えていくのが私たちの使命です。自分の子どもたちも京提灯に誇りを持ってほしい」。既製品ではない、オーダーの京提灯。出来上りを待つ楽しみも工芸品の良さである。

(取材協力：小嶋商店) <http://kojima-shouten.jp/>